極低出生体重児の予後の推移

(分担研究：ハイリスク児の調査に関する研究)
研究協力者：李　容桂

要　約：極低出生体重児の予後の推移を知る目的で、1985年と1990年に高槻病院に入院した極低出生体重児70例を対象に生存退院率および退院後の神経発達予後について検討した。生存退院率は1985年が66%(21/32)、1990年が84%(32/38)と増加傾向であったが統計学的な有意差は認められなかった。1年以上追跡症例における脳性麻痺（CP：ただし独歩不能）、精神発達遅滞（MR：IQ or DQ<70）、両眼失明、難聴、癲癇などを有する予後不良例は1985年が13%(2/15)、1990年が27%(7/26)と増加傾向であったが統計学的な有意差は認められず、またCP発症率も1985年が13%(2/15)、1990年が15%(4/26)と変動は認められなかった。

見出し語：極低出生体重児、生存退院率、神経発達予後、脳性麻痺

緒　言：近年、極低出生体重児の新生児死亡率は著しく低下してきているが、退院後の神経発達予後の推移についてはまだ充分に把握されていない。そこで極低出生体重児の予後の推移について検討する。

研究方法：1985年と1990年に高槻病院に入院した極低出生体重児70例をを対象として、生存退院数とともにその後1年以上の追跡にて脳性麻痺（CP：ただし独歩不能）、精神発達遅滞（MR：IQ or DQ<70）、両眼失明、難聴、癲癇(Epi)の有無などの神経発達予後について検討した。なお上記のいずれの神経発達予後に異常を認めないものを正常と判定した。追跡率は1985年が75%(15/20)、1990年が84%(26/31)であった。また1987年よりNICUでの発達評価により早期療育を行なった。

研究成績：極低出生体重児の生存退院率は、1985年（表1）が66%(21/32)で1990年（表2）が84%(32/38)と増加傾向であったが、統計学的な有意差は認められなかった。1歳未満の退院後死亡は各年とも1例づつで、それぞれ慢性肺障害とダウン症候群の症例であった。また1年以上追跡症例のうち先天異常を合併していた症例は無かった。そして1年以上追跡症例における神経発達予後不良例は1985年が13%(2/15)、1990年が27%(7/26)と増加傾向であったが統計学的な有意差は認められなかった。

1985年度における1年以上追跡した15例中予後不良例は2例(13%)であり、いずれもCPで痙性両麻痺(SD)を残しており、うち1例は新生児期に脳室内出血を発症しており、他は双胎の1児であった。MR、失明、難聴、Epiの症例は無かった。

1990年度における1年以上追跡した26例中予後不良例は7例(27%)であり、うちCPが4例(15%)、MRが5例(19%)、失明が1例(4%)、Epiが4例(15%)に認められた。症例別では、CP(SQ)＋MR＋Epiが2例、CP(SQ)＋MRが1例、CP(SD)が1例、MR＋失明＋Epiが1例、MR＋愛情遮断症候群が1例、Epi＋左片麻痺（独歩可能）が1例であった。このうち3例はNICUより早期療育が施行されており、それぞれ新生児期に脳室周囲白質軟化症、脳室内出血、右脳梗塞などを認めた。

結論：極低出生体重児の生存退院率の増加に伴い、退院後の神経発達予後不良例の増加傾向が懸念されたが、統計学的な有意差は認められなかった。本研究では、重度の発達障害(Disability)を有する児が予後不良例と判定されており、またこれら重症CP児を中心にNICUでの発達評価による早期療育が行なわれてきた。しかし、退院後の長期フォローアップにより、軽症CP児を含む軽度の発達障害を有する児の早期発見と母児への対応がさらに重要であると考えられた。

表1　極低出生体重児の予後(1985年)

出生体重	入院	生存	1年以上追跡症例							
(g)	総数	退院	総数	正常	死亡	CP	MR	失明	難聴	癲癇
<750	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
<1000	8	4	4	4	0	0	0	0	0	0
<1500	21	17	11	9	0	2	0	0	0	0
計	32	21	15	13	0	2	0	0	0	0

在胎	入院	生存	1年以上追跡症例							
(w)	総数	退院	総数	正常	死亡	CP	MR	失明	難聴	癲癇
<26	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
<28	11	4	4	4	0	0	0	0	0	0
<30	9	6	3	2	0	1	0	0	0	0
≧30	11	9	8	7	0	1	0	0	0	0
計	32	21	15	13	0	2	0	0	0	0

表2　極低出生体重児の予後(1990年)

出生体重	入院	生存	1年以上追跡症例							
(g)	総数	退院	総数	正常	死亡	CP	MR	失明	難聴	癲癇
<750	5	2	2	1	0	0	1	1	0	1
<1000	10	7	7	5	0	1 (1)	2 (1)	0	0	0
<1500	23	23	17	13	0	3 (1)	2 (1)	0	0	3 (2)
計	38	32	26	19	0	4 (2)	5 (2)	1	0	4 (2)

在胎	入院	生存	1年以上追跡症例							
(w)	総数	退院	総数	正常	死亡	CP	MR	失明	難聴	癲癇
<26	8	3	3	1	0	1 (1)	2 (1)	1	0	1
<28	8	7	6	4	0	1 (1)	2 (1)	0	0	1 (1)
<30	7	7	5	3	0	2	1	0	0	1
≧30	15	15	12	11	0	0	0	0	0	1 (1)
計	38	32	26	19	0	4 (2)	5 (2)	1	0	4 (2)

( )：NICU早期療育

高槻病院小児科
Department of Pediatrics, Takatsuki General Hospital

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:極低出生体重児の予後の推移を知る目的で、1985 年と 1990 年に高槻病院に入院した極低出生体重児 70 例を対象に生存退院率および退院後の神経発達予後について検討した。生存退院率は 1985 年が 66%（21/32)、1990 年が 84%(32/38)と増加傾向であったが統計学的な有意差は認められなかった。1 年以上追跡症例における脳性麻痺(CP:ただし独歩不能)、精神発達遅滞(MR:IQorDQ＜70)、両眼失明、難聴、癲癇などを有する予後不良例は 1985 年が 13%（2/15)、1990 年が 27%（7/26)と増加傾向であったが統計学的な有意差は認められず、また CP 発症率も 1985 年が 13%(2/15)、1990 年が 15%（4/26〕と変動は認められなかった。